

原発被災者支援報告(今回の水害編)

2019年10月30日 Café de FUKUSHIMA 石川和宏

台風19号は、12日(土)夜神奈川県を通過した。10月の支援活動は、この日に出発する予定だったが、店が閉まり食材の調達をできず、高速道路も、横浜より北側は通行止めになり、断念した。

翌13日(日)に台風通過の後片付けをし、店が開くのを待って食材を調達して出発した。出発時点では、高速道路常磐道は通行止めだったが、間もなく通れるようになるだろうと考えた。通行止めは次々に解除され、渋滞がない分サマリタンハウスにはいつもより早く着いた。途中で那珂川が氾濫した水戸市など水没した住宅が多数見受けられ、利用できなくなったインターもあった。この日は、高速東北道・東北新幹線・常磐線はいずれも不通で、高速常磐道が唯一使えるルートだった。

今回の水害は、たまたま原発被災者支援期間で、サマリタンハウスに滞在しており、この期間中に丸森町と川内村の被災者支援にあたる事が出来た。車の走行は、1,560km(横浜→山元町→仙台市→郡山市→三春町→いわき市、丸森町(往復)、二本松市(往復)、南相馬市(往復)、山元町→川内村(富岡町経由)→横浜(仙台市は、角田・白石経由で三春町に行く予定が、阿武隈川の氾濫で、仙台周りになったための通過)。多くは車窓からだが、そこら中が被災地のように見え圧倒された。

原発被災者支援は、予定通り済んだが、取りあえず急ぐ水害関係のみを報告します。拙い報告が、皆さまの水害被災者支援に役立てばと願います。

【1】福島県・宮城県の台風19号の被害

史上希な甚大被害をもたらした台風19号は、12日(土)午後7時前に伊豆半島に上陸し、13日(日)朝に福島県付近から太平洋に抜けた。7県の71河川135カ所で堤防の決壊し、死者91名、行方不明10名、浸水面積は、11都県25,066ヘクタール(去年7月の西日本豪雨は18,500ヘクタール)で、JR山手線の内側エリアのおよそ4倍になる。土砂災害は、20都県で661件である。住宅被害は、全半壊の1,627棟、一部破損が3,138棟、浸水家屋は62,400棟以上である。

福島県は、人的被害が最も大きく、死者30名(2番目が宮城県で19名)、行方不明2名である。福島県の水害は、原発放射能汚染のように「そこら中が住めなくなった」のではなく、比較的限定された地域です。丸森町も川内村も、何ともないところもたくさんあります。今回の被害は、「どこを見るか」で印象が変わります。

阿武隈川の氾濫

阿武隈川は、福島県と宮城県にまたがり延長が239km、東北第2の大河である(1位は北上川)。福島県の中通りを貫き流れる。各流域の標高は白河市383m 郡山市217m 本宮市201m 二本松市191m 福島市54m 伊達市45m 丸森町15m 角田市7m 船岡町5mである(国土地理院)。この川が41カ所で決壊した(那珂川14カ所、久慈川7ヶ所)。台風による浸水は、阿武隈川水系の12,600ヘクタールが最も広く、全体の半分を占める。少し大袈裟だが、流域の住民にとっては「阿武隈川台風水害」かもしれない。

阿武隈川の流れは、南から北だが、台風は川の流れに沿うように進んだ。豪雨による上流からの水を下流流域で受け流す余裕がなくなり、水かさは急増した。支流の水が本流との合流地点で行き場を失い、逆流してあふれ出す

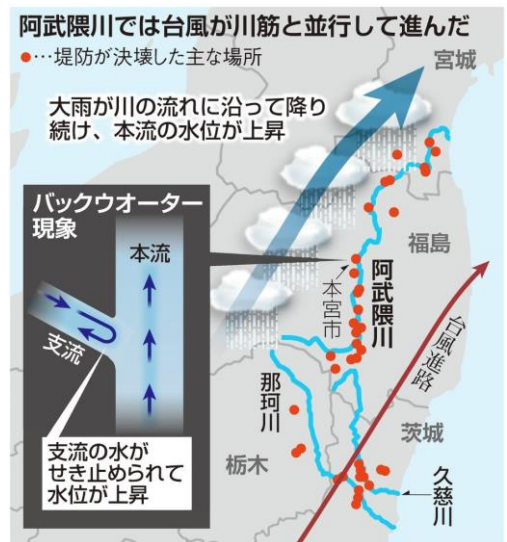
「バックウォーター現象」が多発した。福島県に8地点ある国の主要観測所の全てで観測史上最大の水位になり、阿武隈川で決壊した41カ所のうち8割超(34カ所)は支流で発生した。(図参照:出典産経新聞)

阿武隈川流域での多くの河川の氾濫により、白河市、須賀川市、郡山市、本宮市、二本松市、伊達市、丸森町、角田市などで幅広く浸水した。浸水被害が相次いだ流域の市街地の多くは、阿武隈川の氾濫で運ばれた土砂が堆積して形成された盆地状の土地だという。

阿武隈川は、1986年に「8.5水害」があつて大きな被害が出た。ということで、98年から約3年間で800億円以上の予算が組まれ、改修されたことがある(平成の大改修)。

13日の阿武隈川流域の長時間空撮動画がある。須賀川市、郡山市、本宮市、二本松市、伊達市、丸森町などの様子が分かる。

<https://www.youtube.com/watch?v=fO25IX5SVG0>(福島中央テレビ1時間42分)



【2】丸森町(宮城県伊具郡)について

丸森町の概要・被害

丸森町は、サマリタンハウスのある山元町の西側で、山を挟んだ隣町、宮城県の南端であり福島県に接する。両町の市街地間の距離は、直線で13kmほどである。

丸森町の市街地中央に阿武隈川が流れ、そこに支流が流れ込む。河川流域の盆地である。人口12,946人で農林業の町。65歳以上の約40%という高齢化が進んでいる。

今回の水害では、死者10人(うち8名が60歳以上・宮城県全体の死者の約半数)、床上浸水516世帯(推計)、道路決壊41ヶ所という大被害を受けた。



Café de FUKUSHIMA の丸森町支援

不覚にも隣町にこのような水害が起きていることに気付くのが遅く、支援を思い立ったのが16日(水)だった。その晩から水の買い出しを始めたが、各店「一人一箱です」「一家族一箱です」「ありません」などだった。それでも、サマリタンハウスの在庫と合わせて、2リットル×80本ほど集めた。

17日は、原発被災者支援がない準備の日だったが、その準備は妻の腕力に委ね、出掛けた。



途中の峠道は、通れはしたが各所で崩れたり流されたりしていた。水没した町の様子は、津波の時と同じだった。コンビニもガソリンスタンドも、全部でないが、浸水して営業していなかった。

町の水道は、ダムではなく地下水汲み上げであり、ポンプと水道管が壊れ、全戸断水が続いていた。(29日現在でおよそ2,700戸が未だ断水中。)

水は、一軒一軒声を掛け、「一人一本」配った。道を歩いていた母子や、泥かきをしていた老婦人、保育所にも配ることが出来ました。神明住宅という



阿武隈川沿いの団地(平屋建て築44年)があり、たくさんの方が家具の片付けをしていた。ここで配り終えた。80本配るのにあつという間、正に「焼け石に水」。(19日にKさんという方からお礼のメールを頂いた。多分車に貼ってあるCafé de FUKUSHIMAの看板を見てネットでアドレスを調べたのだと思う。「丸森町神明住宅のKです。10/17夕方にペットボトルのお水をいただきました。生活が安定したら私達もボランティア活動を開始したいです。ありがとうございました。」と書いてあった。)

丸森町には自衛隊の給水所があった。多数の車が水没し、動けなくなり道端に放棄されていたので、給水所に取りに行く手段が失われていると思う。車のない方は、どう水の確保をしたのだろうか。これまでの経験から、役場などには届いているのではないかと思うが、誰が被災者まで届けるのか。高齢者は。

丸森町には、ボランティアは全く入っていないようで、誰にも会わなかった。この時点で丸森町はボランティアの受け入れをしていなかった。この日午後安倍首相が丸森町に来ていた。行き違いになった。(丸森町は、その後20日にボランティアの受け入れを開始した。27日時点で派遣要請が約300件あるのに対し、対応できるボランティアは多い日でも50件とのこと。需要の1/6である。多数の土砂崩れのために、阿武隈鉄道が梁川～槻木間「当面運休」であり、車でないと丸森町には入れない。丸森町にボランティアが少ない理由の一つらしい。)

もし丸森町に行かれるのなら、マスクは必須です。マスクの需要もあると思います。マスクをしている人は、自衛隊・警察官も含めませんでした。

【3】川内村(福島県双葉郡)について

川内村の概要・被害

川内村は、人口2,588人、1,244世帯の小さな村である。福島原発の西12km～30kmにある。20km圏内は2011年3月12日18時に避難指示が出された。14日から屋内退避、16日に全村避難開始。2012年1月31日に村が帰村宣言。面積約200km²で、ほとんどが山で耕地は約5%、大部分は山林である。原発事故前の人口は、3,038人。65歳以上(=高齢化率)が38%(日本全体では28%)と、超高齢化地域である。



川内村の降水量は、10時間雨量が442mm(白河市371mm 郡山市194mm)で、史上最高値。村の中央を木戸川が流れ、村内で支流の小白井川・河内川と合流する。下流には木戸ダムがある。

村は海拔 450mの高地にあり、福島県の浜通りと中通りを分ける阿武隈山系の最高峰大滝根山(1,191m)の東斜面に位置する。台風の風雨は北東方向からだったので、山地(高地)かつ東斜面だったことが川内村に大雨をもたらした。

被害は、行方不明者1名、床上浸水 14 戸(37 人)、床下浸水 66 戸(133 人)、道路の陥没 60 ヶ所、道路通行止め9ヶ所。フレコンバックが 18 袋流失した(福島県全体では 54 袋)。物資を届けた当日は、山形県警の数十人の警察官が、行方不明者の捜索をしていた。写真にある「ロープ」は、橋が流されたために、生活物資を届ける籠を往復させるもの。

川内村の田畑は、除染のため土を削り、数年掛けてやっと耕作可能地になった。実りの秋に土砂が流れ込み、「もう再起できない」という声を聞いた。再度田畑から土砂を取り除き、作物の実る土壌にするには、高齢化した村民にとって誠に過酷と言わなければならない。これが正に原発事故と台風水害の「二重被害」である。



Café de FUKUSHIMA の川内村支援

川内村の水害については、二宮創牧師(岐阜県美濃加茂市太田教会)からの問い合わせで初めて知った。草野誠牧師(岐阜県恵那市恵那教会)からも助言を頂いた。川内村のことは、テレビなどのニュースにほとんど出ていなかったもので、自分は気付かなかった。

太田教会も恵那教会も、予てから原発被災地としての川内村に心を寄せているので、感度が高かったのだと思う。両教会を含む日本キリスト改革派教会中部中会(26 教会)の皆さまは、川内村の原発被災者がまだ郡山市の仮設住宅に避難していた頃から、継続して「米」などの支援物資を届け続けている。

20日(日)までには、中部中会と名古屋岩の上教会からの資金提供の知らせがあった。その日20日と21日で購入を済ませ、21日に川内村に全て届けた。横浜に戻る帰りに寄り道した。皆さんの協力があり、水害があってから間もなく、小さな組織としては大量の物資を届けることが出来た。組織と言うのもおこがましいが、小さいが故に、ニーズの把握・資金・調達・輸送・分配が、ひとかたまりで早く行えた。

届けしたのは、米180kg、レトルトご飯50食、鯖缶48個、カップ麺4ケース、ホッカイロ300個、レトルトカレー98食(これは二本松のフードバンクから)その他食品多数(Café de FUKUSIMA の在庫)

川内村には昼頃に着き、志田さん(川内村支援NPO 昭和横丁代表・村会議員)に会い、NPO 事務所(自宅)に届けた。これからNPO員4人で配るとのこと。太田教会から送られた水なども届いていた。「みんな喜ぶでしょう。有り難うございました」とのことだった。志田さんは、午前中に村議会で被害状況の報告があったそうで、詳しい村の状況を教えて頂いた。昭和横丁は、他の市町村からも物資をあてにされているとのことで、大活躍だが、少しお疲れのようでもあった。





【5】Café de FUKUSHIMA 関係先の状況

復興公営住宅は台風19号に伴い、いわき市、相馬市、川俣町の計141戸で床上浸水の被害。川俣町は、壁沢復興住宅(12月訪問予定)であり、床上浸水し自衛隊が泥出しをしたとのこと。自治会長に支援の申し出をした。

復興住宅の支援をしているNPO みんぷくの話では、福島市拠点・いわき拠点・郡山拠点のいずれでも、壁沢を除き復興住宅に被害はなかった模様。福島県は、復興住宅150戸を罹災者に、3ヶ月間無償提供する。希望者には正式な入居への移行も認める。

原発事故の避難住民向けに整備した仮設住宅も、一時的な避難所として住民に提供される。福島県は、郡山、いわき、本宮、南相馬4市の仮設住宅を活用する予定である。

【6】Café de FUKUSHIMA 支援の今後

皆さまとの連携

今回の水害は、範囲が広く、何ともない所、大変だが報道も救援要請も無い所など、錯綜している。Café de FUKUSHIMA の支援は、限られた場所での「焼け石に水」だが、少しでも被災者の助けをしたい思っている。Café de FUKUSHIMA は、「原発被災者支援」だが、この際出来ることは果たしたい。特定の組織に属さない自由度と、これまでに蓄えた人脈・土地勘・ノウハウが、少しある。

数教会から必要物資の問い合わせを頂いて、回答している。順次届くと思うので、必要なところに届ける。被災地での必要は、冬の衣類・レトルト食品・マスク・靴下・手袋・缶詰などになる。(多くの被災地は山間部・高地の寒いところ)。輸送コストがかさむものは、こちらで調達することも可能なので、指定の品目があればそれも教えて頂ければ届けます。

支援のかたち

今後しばらくは、「被災者に直接届ける支援」望ましいでしょう。関係者の邪魔にならないよう配慮しつつ。自治体(役場)自体が水害に遭っており、職員も同じです。支援物資も、「個人からの受け付けない」そうです。受付・仕分け・分配の人手やノウハウがないからでしょう。従って、「配るノウハウや人手がある団体」を探して託するか、そうでなければ「直接届ける」のが一番です。

丸森町は、10月30日現在も「個人の方からの支援物資」はお断りです。理由は、「その整理に時間がかかっており、品物によっては、当分間に合う数量になっております。」とのこと。川内村は村からこれらのことでの表明は(まだ)ありません。

今回の被害を目の当たりにすると、Café de FUKUSHIMA の力は小さいと思います。出来る支援は、「焼け石に水」です。でも、何人かはその水を飲み、空腹を凌いだので、意味のないことではないと考えています。

被害と支援:他の地域・団体などの状況・これから

NPOカリタス南相馬は、19日に物資をお届けした時点で南相馬市(鹿島区)の泥出しボランティアの派遣準備に入っており、翌日から開始するとのことで、感心する素早い対応をしていた。

フードバンク二本松(柳沼千賀子代表)からは、19日(土)同市若宮復興住宅でのイベントの帰途、レトルト食品多数を頂き、21日(月)には川内村に届けられた。柳沼さんが代表をしているNPOに「福島やさい畑～復興プロジェクト」があり、Café de FUKUSHIMAも米を買い協力したことがある。このNPOが支援をしている本宮市の農家が水害で大打撃を受けたとのこと。福島県の農家は、原発事故のために販売価格が低迷し苦勞している。今回の水害は彼らにとっても「二重災害」である。

いわき市は、旧知の牧師先生に、「今必要とする支援や物資・被災者に物資を届ける組織・ルート」などを問い合わせ中で、様子が分かれば、手伝いたい。

本宮市も被害は甚大で、知り合いに問い合わせしている。不明のことが多く、必要とする支援や物資・被災者に物資を届ける組織・ルートは、手伝いをする状況には至っていない。

Café de FUKUSHIMAは、11月7日前後に横浜を発ち、11日に、取りあえず川内村に水害後2回目の物資を届ける。「ありっただけ」。